

インドにおけるヴェーダの伝承について

梶原 三恵子

はじめに

ヴェーダとは、記録にのこるかぎりインド最古の宗教文献群の総称である。紀元前 1500 年ごろ、インド・ヨーロッパ諸語のひとつである古インド・アーリア語（サンスクリット語）の話者たちがインド亜大陸に入り、前 3 世紀頃までの約 1000 年以上にわたって、一大宗教思想文化を築き上げた。ヴェーダはその宗教思想を伝える聖典として集積されたものである。その後散逸したものも数多いとみられるが、それでもなお大量の文献が現代まで伝わっている。

ヴェーダ文献が伝える宗教思想は、その聖典群の名から「ヴェーダの宗教」、あるいは「ブラーフマナ」とよばれる祭官階級を中心とする宗教の意味で「ブラフマニズム」とよばれる。現代日本語では、「ブラーフマナ」という語の漢訳「婆羅門」のカタカナ表記「バラモン」を用いて「バラモン教」と呼称されることも多い。

紀元前のインドを席卷したこのヴェーダの宗教（ブラフマニズム）は、紀元後にヒンドゥー教（ヒンドウイズム）と総称される新しい宗教運動が興隆してからは、インド文化の表舞台から退いた。だが、ヴェーダの伝承そのものが失われたわけではなかった。ヴェーダの宗教と文化は、ヒンドウイズムをはじめとするポスト・ヴェーダ諸文化と、互いに影響を与えながら並存し、混淆し、バラモンたちの居住地の拡大とともにインド亜大陸全体に伝播した。ヴェーダ聖典とそれが伝える宗教儀礼は、現代インドでも今なお一部地域においてバラモン階級のあいだで伝承されている。

本報告では、ヴェーダ文献の歴史を、おおまかに初期ヴェーダ（紀元前 12 世紀頃から前 10 世紀頃、なお年代は以下も含めすべて暫定的なものである）、中期ヴェーダ（前 10 世紀から前 5 世紀頃）、後期ヴェーダ（前 5 世紀から前 3 世紀頃）、その後をポスト・ヴェーダとして、インドにおけるヴェーダの伝承を概観する。

1. ヴェーダの宗教における言葉と思想

ヴェーダの宗教の中枢をなすのは、聖なる「言葉」と、それを操って神々に呼びかけ、祭火に神々への供物を献じることを中心として執り行う「祭式」である。ここでいう聖なる言葉とは、正しい場において、正しい知識をもつ者が、正しく発話する、特別な霊力をもつものをさす。初期ヴェーダの宗教思想では、そうした聖なる言葉とその霊力が「ブラフマン」とよばれた。

祭官（詩人）たちは、ブラフマンに関与する者という意味で「ブラーフマナ（バラモン）」と称された。ブラフマンの知識はかれらの独占物であり、その知識の独占権こそが、社会におけるバラモン階級の地位の高さを担保していた。この世の人間たちのうち、バラモンのみが言葉の全貌を知っていることについて、ヴェーダ文献の中で最も古い『リグヴェーダ』は次のように謳っている。

言葉は四つの四分の一からなると測られている。思慮あるバラモンたちはそれらを知っている。

「四つのうち」秘密裡に蓄え置かれた三つを彼らは発動させない。「一般の」人間たちは言葉の四分の一「のみ」を話している。（『リグヴェーダ』1.164.45）

ヴェーダの宗教を担った人々は、初期ヴェーダ以降は、インド亜大陸北西部から北インド全域に移住・定住し、勢力範囲を拡大していった。それと軌を一にするように、ヴェーダ祭式の体系化が始まった。各種祭式の雛型となる基本形が定められ、供物、時季、目的、作法、日程などの多種多様な要素が整理され、複数の家系の祭官たちが協働して挙げる共同体祭式の体系が整備された。バラモンたちの祭官としての職務分掌もすすんだ。

ヴェーダ聖典も祭式での使用にむけて編纂されていった。神々への讃歌を中心とする初期ヴェーダ文献『リグヴェーダ』に加え、中期ヴェーダ時代には、祭官たちが祭式で用いる旋律と祭文が『サーマヴェーダ』『ヤジュルヴェーダ』として集成された。さらに、祭式の儀軌、解釈、関連する神話、背景にある思弁などが、『ブラーフマナ』『アーラニヤカ』『ウパニシャッド』という文献群にまとめられ、いわゆる天啓聖典（シュルティ）を拡大させていった。

これらの初期・中期ヴェーダ文献の拡大の過程で、死後の天界上昇の希求、現世の行いと死後の世界における処遇の関係についての考察、輪廻思想、個人を構成する諸要素と宇宙原理の対応についての思索など、古代インド思想における重要な論点が導出され、それらに対するバラモン学匠たちの思弁が深化し、発達していった。ヴェーダの宗教の特色のひとつは、こうした哲学的思索が、ヴェーダ祭式を解釈し理論づける文脈のなかで生まれたことにある。

ヴェーダ聖典の拡大が一段落してテキストが固定化されるまでの、各祭官の職務の分化とバラモン諸家系の居住地域の変遷が進行していた時期に、伝承は分岐しはじめ、学派が各地で分立した。爾来ヴェーダは、聖典のテキストと、祭式の儀軌の知識とが共に、諸地域で学派ごとに伝承されていくこととなった。

2. ヴェーダ聖典の伝承：初期ヴェーダから中期ヴェーダの時代

ヴェーダ聖典は、師（アーチャーリヤ）から、ヴェーダ学生（ブラフマチャーリン）へと、口頭で伝授された。ヴェーダ学生となるには、定められたヴェーダ入門儀礼を経る必要があった。

ヴェーダ入門儀礼は、インドの文献としては『リグヴェーダ』に次いで二番目に古いとされる初期ヴェーダ文献『アタルヴァヴェーダ』以降、随所で言及がみられる。この儀礼は、「入門者は師の胎児になり、師から誕生する」という観念を伴うことで知られるものである。すでに『アタルヴァヴェーダ』にその観念が謳われている。

師はヴェーダ学生を「自らのもとへ」入門させながら、内側で「自分の」胎児とする。[師は]彼を三夜、腹の中に保つ。[彼が] 生まれると、神々は彼を見るために彼のところへ集まってくる。（『アタルヴァヴェーダ』シャウナカ伝本 11.5.3; パイッパラダ伝本 16.153.2）

ここで「三夜腹の中に保つ」といわれているのは、師がそのあいだ入門者を「妊娠」し、入門者は師の「胎児」となった状態で過ごすことを意味する。胎児となった入門者は、時が満ちると師から「誕生」し、師にヴェーダを教えられることになる。

中期ヴェーダの『ブラーフマナ』文献には、入門儀礼において師から「誕生」した者にヴェーダを教えることについて、次のように述べる一節がある。

次に「入門儀礼において、師は、ヴェーダ学習の第一歩として」サーヴィトリ詩節をこの者

（入門者）に教える。かつて人々はこれを〔入門から〕一年後に教えていたものだった。「胎児たちというのは〔受胎から〕一年後に生まれるものなのだ。このこと（入門から一年後にサーヴィトリーを教えること）によって、この者が生まれたとき（師の胎児になった入門者が師から誕生したとき）、彼に言葉を置き定めることになる」と〔考えて〕。（『シャタパタ・ブラーフマナ』11.5.4.6）

師が入門者を「妊娠」する期間は、『アタルヴァヴェーダ』では三夜とされているが、ここでは一年となっている。『シャタパタ・ブラーフマナ』ではこの後、一年を6か月、24日、12日、6日、3日と同置し、最終的には入門の当日にサーヴィトリーを教えると述べる。要は、ヴェーダに入門する者は、通常の胎児が受胎してから誕生するまでと同等とみなしうる期間を、師の胎児として過ごす必要があったということである。この、入門者が胎児期間を過ごすという観念は、実際に、学生が入門後ヴェーダ学習に入る前に一定の期間を師のもとで身を慎んで過ごすという形で具現化される。

さらに、中期ヴェーダの『ウパニシャッド』文献には、ヴェーダの学習がバラモン子弟の義務であると父が息子に語る一節がある。

シュヴェータケートウ・アールネーヤ〔という若者〕がいた。彼に父（学匠ウッダーラカ・アールニ）は言った、「シュヴェータケートウよ、ヴェーダ学生（ブラフマチャリヤ）を住せよ。わが子よ、我々の家系で、〔ヴェーダを〕学習し終えずバラモンもどきのようになる者はいないのだ」と。（『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』6.1.1）

バラモンの人生規範に、師に入門しヴェーダを学習する過程を義務として組み込めば、ヴェーダ伝承の継続性をより強固にすることができる。後期ヴェーダでは入門と学習がバラモンの人生儀礼のなかに位置づけられていく。

3. 入門儀礼の位置づけの変化：中期ヴェーダから後期ヴェーダへ

前述のとおり、ヴェーダは、聖なる言葉の知識と、それを用いて行う祭式の伝統の総体として、バラモンによって創られ、バラモンによって伝えられた、バラモンのためのものであった。入門儀礼を行って師からヴェーダ学生として誕生し、ヴェーダを学ぶことができたのも、当然バラモンのみに限定されていたはずである。

いっぽう、初期ヴェーダの終わりごろから中期ヴェーダにかけて、北インド各地に部族国家が成立し、王権が増大しはじめた。これに伴い、ヴェーダの世界に、祭式のスポンサーとして王族階級（ラージャニヤ／クシャトリヤ）が関与し始めた形跡がみられる。ヴェーダ祭式には、即位式をはじめとする大規模な王権儀礼が複数含まれている。中期ヴェーダに属する『ブラーフマナ』文献群には、バラモンと王族が祭式の解釈に関して対論を行う物語も収められている。

天啓聖典の後で成立したとされる後期ヴェーダの文献を聖伝文学（スムリティ）と総称する。各学派の『シュラウタースートラ』（共同体祭式綱要書）、『グリヒヤースートラ』（家庭儀礼綱要書）、『ダルマースートラ』（律法書）がこれに属する。うち後の二者には、ヴェーダ入門儀礼に関する詳細な規定が含まれている。

これら後期ヴェーダ文献が述べる入門儀礼の規定の特徴は、バラモン階級のみならず、王族階級と庶民階級にも、ヴェーダ入門儀礼を課すとしている点にある。すなわち、『グリヒヤースートラ』と『ダルマースートラ』は、いわゆる四ヴァルナ — バラモン、ラージャニヤ、ヴァイシュヤ、シュー

ドラ — のうち、奴隷階級シュードラを除く上位三階級すべてに、少なくとも形式上、ヴェーダへの入門、ヴェーダ聖典の学習、ヴェーダ祭式の挙行の権利を開放し、義務づけるのである。

たとえば、『グリヒヤーストラ』には、次のように、入門儀礼について、上位三階級それぞれにふさわしい挙行年齢を述べるものがある。

受胎後 8 年目に、バラモン [の男子] を入門させるべきである。受胎後 11 年目にラージャニヤを、受胎後 12 年目にヴァイシュヤを [入門させるべきである]。 (『バウダーヤナ・グリヒヤーストラ』 2.5.2)

また、『ダルマーストラ』には、以下のように、入門、ヴェーダの学習、祭火設置（ヴェーダ祭式挙行の出発点となる）を、上位三階級が行うと記すものがある。

ヴァルナは四つある：バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシュヤ、シュードラ。… シュードラでなく悪行を行わない者には、入門、ヴェーダ学習、祭火設置が、実りある行いである。シュードラには、他の [上位三つの] 階級に従順であることが [行いである]。 (『アーパスタンバ・ダルマーストラ』 1.1.1.4-7)

ヴェーダ聖典学習への入門の権利を上位三階級に与えるということは、『アタルヴァヴェーダ』以来ヴェーダ入門儀礼に付随する「師から誕生する」という特別な観念を担う権利を、バラモン以外の者にも認めるということである。『ダルマーストラ』には次のような表現がみられる。

いかなるときも師を害してはならない。というのは、師は知から入門者を生むから。それが最高の誕生である。[実の] 父母は身体だけを生む。春にバラモン [の男子] を入門させるべきである。夏にクシャトリヤを。秋にヴァイシュヤを。… (『アーパスタンバ・ダルマーストラ』 1.1.1.15-19)

『ダルマーストラ』群とその後の『ダルマシャーストラ』群（あわせてダルマ文献と総称される）は、ヴェーダ入門儀礼を行うべき上位三階級を「再生族」（ドヴィジャ）、入門を許されないシュードラ階級を「一生族」とよんで、入門儀礼の可否を、ヴァルナの上下の境界として位置づける。

とはいえ実際には、上位三階級の全員 — 特に庶民階級ヴァイシュヤ — が、入門式を行い、ヴェーダ聖典を学習し、ヴェーダ祭式を挙行したとは考えにくい。上位三階級にヴェーダへの入門を認める規定は、ダルマ文献がヴァルナ制度を確立するにあたって、ヴェーダへの関与資格という主題を利用したものともみべきであろう。同じダルマ文献内であっても、四ヴァルナの定義について述べる文脈以外では、「再生族」という語は、ほぼ「バラモン」の意味で用いられている。これはその後の、ポスト・ヴェーダ期の文献でも同様である。

4. ポスト・ヴェーダ期以降のヴェーダ伝承

ポスト・ヴェーダ期以降、バラモン階級の中でヴェーダ聖典の暗誦学習と祭式挙行を人生の主たる業務とする者は少なくなっていたであろう。紀元後のインドでは、文学、哲学、論理学、文法学、政治学、天文学、建築学、数学、医学等々、さまざまな学術分野が大きく発達した。学術書の多くはサンスクリット語で著されている。そうした学問と文化には、バラモンが関与したか、あるいは中心となって発展させたものが、少なくなかったと考えられる。ヴェーダ聖典の一部はインド

哲学や土着文法学の発展の素材になったが、ヴェーダ文献とヴェーダ祭式を一体のものとする古来のヴェーダの宗教は、紀元後のサンスクリット文化においては表面から退いていった。

それでも、バラモン階級の内部では、ヴェーダ入門儀礼を行い、ヴェーダを学習する慣習が継続した。時代により地域によって、衰退したり途絶したりまた復興したりなどの起伏はあったであろうが、ヴェーダの伝承は連綿と受け継がれ、現代インドでも一部地域に存続している。

ヴェーダ伝承の継続を可能にしてきた要素はいくつか考えられる。まず、バラモン階級にとって、ヴェーダ伝承家系であることが地域社会における自らの地位の高さを保証するものであったであろうことが挙げられる。また、バラモンたちが人生の節目節目に行う通過儀礼のなかには、ヴェーダの伝統が深く根ざしている。さらに、地域の政治的ないし経済的権力者が自らの権威づけのためにヴェーダ伝承を後援する場合もあったであろう。さまざまな要因に支えられ伝わってきた古代の聖典と祭式が、今日のバラモン社会にとってどういう位置づけにあるのかを調査することが、インドにおけるヴェーダの伝承を考える上での今後の課題のひとつである。

参考文献

- 梶原 三恵子 2003.「ヴェーダ入門儀礼の二つの相—通過儀礼と学習儀礼」『佛教学セミナー』78: 1-20.
- 2013.「聖なる〈ことば〉の伝承—古代インドのヴェーダ学生をめぐる—」『文化交流研究』東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 26: 47-61.
- 藤井 正人 2007.「ヴェーダ時代の宗教・政治・社会」『南アジア史』1: 57-85. 山川出版社.
- 2012.「ヴェーダの復興—南インド・ケーララ州における古代と現代の接触—」『コンタクト・ゾーンの人文学』Ⅲ（田中雅一・小池郁子編）270-302. 晃洋書房.